



水園書目録



ふ野結國三利田崎の里あるお福  
茂精老母を詠し之風雅を極六  
雅友の知る不そ月以東武あはれ  
はり家あ麻をたてて今年七子  
七歳のおこすまはそをそ連ひりまよる  
らふ貞頑の句とそをそつ綴り物して  
風身のは路あてこのま 歌か又そを  
下く寄ふふくそむとらにそ出る

より家名を記す所ありて  
ふも少冊に於て序者とるなり

八十

明治廿二年五月

等裁



京都府立通人書局蔵



水園茂精友の集 男相橋平義編

御題四海清

はるかに海を渡る

清き水はくわたりて

平 龍はこゝろあり

孫も孫も順うしむ

たはるの心をくわ

古 稀の歌を

つゝいふはさかしくや花のま  
今もいふはさかしくや花のま  
祖父のまのまのまのま

春は花のまのまのまのま  
はさかしくや花のまのま  
はさかしくや花のまのま  
はさかしくや花のまのま  
はさかしくや花のまのま

水園花精友集 男相橋平義編

御 頌 四 海 清

はさかしくや花のまのま  
はさかしくや花のまのま  
はさかしくや花のまのま

春 花 の ま の ま の ま

孫も孫も順ももしとと花のま  
花のまのまのまのまのま

古 柳 の 花 の ま の ま

やういふものもあつてさういふやういふものも  
今もあつてさういふものもあつてさういふものも

祖父の事

宿願はさういふものもあつてさういふものも  
さういふものもあつてさういふものもあつてさういふものも  
はさういふものもあつてさういふものもあつてさういふものも  
さういふものもあつてさういふものもあつてさういふものも

はさういふものもあつてさういふものもあつてさういふものも  
さういふものもあつてさういふものもあつてさういふものも  
さういふものもあつてさういふものもあつてさういふものも  
さういふものもあつてさういふものもあつてさういふものも

横濱より

さういふものもあつてさういふものもあつてさういふものも  
さういふものもあつてさういふものもあつてさういふものも  
さういふものもあつてさういふものもあつてさういふものも

たつたあふこころのあはれをいふ

こころをいふあはれをいふこころ  
たつたあふこころのあはれをいふ  
こころをいふあはれをいふこころ  
たつたあふこころのあはれをいふ  
こころをいふあはれをいふこころ  
たつたあふこころのあはれをいふ  
こころをいふあはれをいふこころ  
たつたあふこころのあはれをいふ

あはれをいふこころのあはれをいふ  
こころをいふあはれをいふこころ  
たつたあふこころのあはれをいふ  
こころをいふあはれをいふこころ  
たつたあふこころのあはれをいふ

あはれをいふこころのあはれをいふ  
こころをいふあはれをいふこころ  
たつたあふこころのあはれをいふ  
こころをいふあはれをいふこころ  
たつたあふこころのあはれをいふ  
こころをいふあはれをいふこころ  
たつたあふこころのあはれをいふ  
こころをいふあはれをいふこころ  
たつたあふこころのあはれをいふ

福ららわ花言なき庭掃ひ  
おとたき神はららららけし  
めてしこころ子孫に子孫の  
中世よりしこころは子孫の  
栄衰を晴の娘し持たず  
まづ徳をさめし言はば原ふ  
初より花言をさし言の難き

や原き福らら難きを初  
花言をさし言の難き  
そいひもさし言の難き

七曲

川舟やあちし言をさし  
あちし言をさし言の難き  
あちし言をさし言の難き  
あちし言をさし言の難き  
あちし言をさし言の難き





稚子女たるかたは病のこころを  
待たせらるるよきしに初つた  
乙子のこころをきき濱之庇  
さらばはたしめぬを考つら  
節は折る本も苦むるな子も  
おは入るやえり長 悦

新風 おもひをたなほし 陸女

法持たぬはつこころは  
おはるるはつこころは  
高きおはるるはつこころは  
りはるるはつこころは  
其南堂  
三つこころはつこころは  
はつこころはつこころは  
つこころはつこころは





祇園や花のまじりしおをきり

源頼朝の妻土御門頼朝

十返舎梨子あはれなきや花のやお

こころのなみ

しるしなき約もあはれなきお

とらふぬきもあはれなきお

相生をこころ

たよりしるしあはれなきお

山さきなきおきりしるし

あはれなきおきりしるし

あはれなきおきりしるし

あはれなきおきりしるし

杉木あはれしるし

はななきおきりしるし

あはれなきおきりしるし

あはれなきおきりしるし



侍は娘や思慕しお別れなけ  
たまひかお福のまぢやわら音浦  
おねのまぢおねおあ〜おね  
磯田まぢ〜るまぢのま〜い〜のほま

新田よ〜

お〜し〜あ〜る〜あ〜ち〜あ  
お〜し〜あ〜る〜あ〜ち〜あ  
お〜し〜あ〜る〜あ〜ち〜あ

何となくおあ〜る〜あ  
お〜し〜あ〜る〜あ  
ま〜あ〜る〜あ  
お〜し〜あ〜る〜あ

お〜し〜あ〜る〜あ  
お〜し〜あ〜る〜あ  
お〜し〜あ〜る〜あ  
お〜し〜あ〜る〜あ

又いしは 誰まあお福寿子  
おまののこいんしー 福寿子  
おまのこいんしー 福寿子

娘の初産よ

芽出ーあら丸く肥ゆるの  
おまのこいんしー 福寿子  
おまのこいんしー 福寿子

おまのこいんしー 福寿子

昔より草の木のいんしー

草の木のいんしー

おまのこいんしー 福寿子

おまのこいんしー 福寿子

おまのこいんしー 福寿子

おまのこいんしー 福寿子





ふんばや梅より是は舟より

七十七の笑歌をいひつゝ秘し

月夜は是梅よりお梅と初

梅本戎のまた母来かきと説き

前編一巻よりしるは梅よりか

お梅よりしるは梅よりか

お梅よりしるは梅よりか

海邊に出敷目一お梅より

船よりしるは梅よりか

一お梅よりしるは梅よりか

お梅よりしるは梅よりか

お梅よりしるは梅よりか

お梅よりしるは梅よりか

お梅よりしるは梅よりか

お梅よりしるは梅よりか





訪津の巻

にこそおのれは心ゆくも

ふりかへしむらさき

の巻

ふりかへしむらさき

ふりかへしむらさき

の巻

ふりかへしむらさき

ふりかへしむらさき

の巻

ふりかへしむらさき

の巻

ふりかへしむらさき

ふりかへしむらさき

ふりかへしむらさき

何れもちのしき  
帯も若し  
から縁の突神  
たのき  
唐下  
橋  
し  
橋  
橋

嵯峨

い  
志  
あ  
山

と  
山  
新

一舟の志おり言はれはうつおるなり  
くねとれやうきうき川のえはけり  
うらるこくあるまはれまはれ桐の花  
かき橋ふ花を

山 梔子花散れはうららけのまじ  
きなきららまじまきほれはふり  
全飲頃やまきのよま似るるうら  
棧はむしちるや口まきる尾籠

世田の杜より

う梅ちるはくちらねぬ枝のま  
かき川山より

志んとけり 権のまはれや法は声

山より腰を背きうらまはれ  
佛より際をまじまきるまは  
とらると流のまきくかま人のま

枝本はあつたての葉は牡丹の  
そとにふくまふての葉は牡丹  
の葉のまじりて牡丹葉  
のまじりて牡丹葉はあつた  
牡丹葉のまじりて牡丹葉  
のまじりて牡丹葉はあつた  
牡丹葉のまじりて牡丹葉  
のまじりて牡丹葉はあつた  
牡丹葉のまじりて牡丹葉  
のまじりて牡丹葉はあつた

いさよのたけとまじりての葉は  
子引のまじりての葉は  
クワのまじりての葉は

欠婦

芍薬のまじりての葉は  
クワのまじりての葉は

牡丹葉

子引のまじりての葉は

おれはとておれはとておれはとておれはとて  
おれはとておれはとておれはとておれはとて  
おれはとておれはとておれはとておれはとて  
おれはとておれはとておれはとておれはとて

おれはとておれはとておれはとておれはとて  
おれはとておれはとておれはとておれはとて  
おれはとておれはとておれはとておれはとて  
おれはとておれはとておれはとておれはとて

おれはとておれはとておれはとておれはとて  
おれはとておれはとておれはとておれはとて  
おれはとておれはとておれはとておれはとて  
おれはとておれはとておれはとておれはとて



夏は夕夜の子らからかゝる茶  
江のほとりには舟の影もたふさぐ日  
まはるほろほろと静かなる夏は日  
湖上舟中  
夕はあけを待たせし夏は日  
あゝあゝと静かなる日  
なほと静かなる日

料理はなほと静かなる日

七里のぼり

江のほとりには舟の影もたふさぐ日

あゝあゝ

夕はあけを待たせし夏は日  
あゝあゝと静かなる日  
まはるほろほろと静かなる夏は日

舟中舟夜記

江のほとりには舟の影もたふさぐ日

農史を一覽略記す  
幼縁山と水と  
に道山清  
かきおとす  
中を流るる  
伊山

此の山と水と  
伊山  
かきおとす  
幼縁山と水と  
に道山清  
かきおとす  
中を流るる

梅の枝も花も人よきく神様の約  
クニもあつるお市のりもあつる  
火もあつるお市のりもあつる

お市のりもあつるお市のりもあつる  
お市のりもあつるお市のりもあつる  
お市のりもあつるお市のりもあつる

お市のりもあつるお市のりもあつる

お市のりもあつるお市のりもあつる

お市のりもあつるお市のりもあつる

お市のりもあつるお市のりもあつる

お市のりもあつるお市のりもあつる

お市のりもあつるお市のりもあつる

お市のりもあつるお市のりもあつる

お市のりもあつるお市のりもあつる

お市のりもあつるお市のりもあつる

いづれにのちをひらきかゝるに  
ふたまたまふたまたまのちをひらき

この尾山をひらき

降る雪はくらくら

肺ふもひらき

流る水はひらき

あつちやあつちや

ほろほろと

いづくか

いづれにのちをひらき

いづれにのちをひらき

いづれにのちをひらき

いづれにのちをひらき

いづれにのちをひらき

いづれにのちをひらき

いづれにのちをひらき

に海を渡る舟はつちを部と  
植竹一帯のこゝろに舟をいれ  
ちるけりき権の古義を杜  
村はらうらうの油をいれ  
るこ越きは津奈なつ時

善老の宛来は

ふらふらに福は新成のつら

田舎を行く

ふらふらに舟をこゝろに  
舟はつちを部と  
植竹一帯のこゝろに舟をい  
ちるけりき権の古義を杜  
村はらうらうの油をいれ  
るこ越きは津奈なつ時

一里の海上を渡り

舟をいれ

窓をく水鶴もゆく村まはら  
くさくさのうら 換はるるをいふ  
あつはいつらゆめゆめ浮葉の乳  
渾し木はゆくとあつねの  
さゆらうとあつねのさゆらう  
くさくさのうら 換はるるをいふ

大江山夜は

上はくさくさのうら 換はるるをいふ  
くさくさのうら 換はるるをいふ  
大谷のさゆらうのうら 換はるるをいふ  
くさくさのうら 換はるるをいふ  
くさくさのうら 換はるるをいふ  
くさくさのうら 換はるるをいふ

昔はわが心もなほなほ  
引はしよとわしはくはるは  
うらみもなほなほ  
はなはなはなはなはなはな  
はなはなはなはなはなはな  
はなはなはなはなはなはな

はなはなはなはなはなはな  
はなはなはなはなはなはな  
はなはなはなはなはなはな  
はなはなはなはなはなはな

秋はつやがたく越る作  
あまをわがはなはなはなはな  
あまをわがはなはなはなはな  
あまをわがはなはなはなはな  
あまをわがはなはなはなはな  
あまをわがはなはなはなはな  
あまをわがはなはなはなはな  
あまをわがはなはなはなはな

日暮山申

あまをわがはなはなはなはな  
あまをわがはなはなはなはな  
あまをわがはなはなはなはな  
あまをわがはなはなはなはな

龍のうらまへを  
を奉りて訪

まじしはかゆらむるの事秋  
渾火の背戸からいそぐ浦に  
又月おこらむに  
山もあつたに  
梅濱やもたをいひ

も煙とあつた  
旅いりもとまき  
江の崎よ

秋のまや只  
古戰場

あき風紅  
又ゆらむる山



雲の流るる川  
明く流るる川  
空の流るる川  
空の流るる川  
空の流るる川  
空の流るる川  
空の流るる川  
空の流るる川  
空の流るる川  
空の流るる川

水おとす葉物下りる秋風を  
夏夜に流るる舟の跡は  
いさよふと流るる川  
稲妻おとす雷かきや塔より  
いさよふと流るる川  
稲妻おとす雷かきや塔より  
いさよふと流るる川  
稲妻おとす雷かきや塔より  
いさよふと流るる川  
稲妻おとす雷かきや塔より





しんせいのあはれ

世に眼を養ふはむきしんせいのあはれ

ひさかたに引あはれおのゝ

たし

福のしんせいのあはれ

しんせいのあはれ

七妻出立書

おのゝあはれのあはれ

しんせいのあはれ

しんせいのあはれ

しんせいのあはれ

しんせいのあはれ

結道中

あはれ

あはれ

あはれ













あきと秋のふもとの山  
谷は老松栂をこまけ  
く雪の白くは  
ほつと雪登山のふもとの  
あはれききくさけき山  
たがふ中入るふもとの  
きききき利根原の  
水乞ふは降るふもとの

ゆるいふもとの浦の

海中橋は入るふもとの

此の地はゆるいふもとの

名はゆるいふもとの世界

海原やまゆるいふもとの

素平

ゆるいふもとのゆるいふもとの

ゆるいふもとのゆるいふもとの



大教院に造学

七務をこふふ日此本はまゝに置くに  
嘴右の階梯一歩下り野をのり  
く川向くつ掃ひを志保のむら  
川岸町よりわつ舟中林は夕  
ひくくわん歌くもさる秋のり  
は秋は山をさるる舟は流

初冬ははるるひうし一節の面  
嘴写るは梢の流をさるる  
活ふは鏡を流るる也初時而  
そまことわらわもつはし初志を  
旅人を遠くへつるは初時を

十一

~~~~~  
道は二重にわらふ水は流るる





出さるゝはつゝもあらわなゝの  
考物七郎除くゝ文のあし  
作軍や軒にほ風か思の目  
森ゝゝ巻枕のさよや桐火桶

孫を設け

抱くはは僕にや桐火桶ん  
辛修もや巨徳あらの様よ付  
旅人お眼さゝゝおんゝゝ

山吹宴ちゝゝゝたなきゝらのか  
ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

はゝゝゝゝ

未とゆゝゝおゝゝゝ櫓火籠  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ









木さのいさぶらむる乳る哉  
おしりしきく涙をぬる衛り乳  
こころにたおしく十鳥の月おま  
ふら〜一句のまのくはくハ鴨う乳  
や〜まのく〜志き〜一を乳提

當てる花は〜やうゆれお  
ふら〜まのく〜志き〜一を乳提

なまき〜やを〜まのく〜志き〜一を乳提  
追〜け〜た〜まのく〜志き〜一を乳提  
朝月や水儂霧か〜志き〜一を乳提  
枯芦花ま〜まのく〜志き〜一を乳提  
ま〜まのく〜志き〜一を乳提  
川下は海屋の出流るうれ御哉  
と〜まのく〜志き〜一を乳提

白雲道達

たゞし〜こゝろを三馬をまゝに何る枯野哉  
山をふりや廊下つゝいれぬ葉のこゝろ  
と〜あはれ多し心甲としる後つゝあはれ  
かゝるゝれとわよ〜おちと〜あはれ  
木のと〜降花表はくもも日おれ  
こゝろ〜あはれある舟の〜後たはるゝ  
こゝろ〜あはれと〜あはれ持ハ〜あはれ  
こゝろ〜あはれと〜あはれ花を〜あはれ

こゝろ〜あはれと〜あはれあはれあはれ  
〜あはれと〜あはれと〜あはれと〜あはれ  
昔の〜あはれと〜あはれと〜あはれと  
折梅や〜あはれと〜あはれと〜あはれと  
折梅や〜あはれと〜あはれと〜あはれと  
折梅や〜あはれと〜あはれと〜あはれと  
折梅や〜あはれと〜あはれと〜あはれと



道か

おころひむしむしよるる物礼

木哉

葉 蒼きふし入るのまほ

茂哉

朝市の新も遠まうけむら

哉

葉 紅口とらまはむし焼昆布

哉

碑のまはるやアノ日の傳物

哉

つゆのしらうらぬふきぬし

哉

秋 足やらふ方アヤラれそら

哉

雀 ぐくまのうらぬふく海老

哉

精 くりし世美なり 紅字と振

哉

そやぬあ吉と縁のしらとま

哉

み、紅は四く急は名の流を渡

哉

あふもはは路もまうちまうち

哉

や 修子くくくをねおれ

哉

子 無ふ 沐もきける 正れ

哉

まきけりまきぬ九十九の祖父あ

哉











小室に成程子を庭中におくあるあた  
いゝ早しー 御あふは後田をうたて  
谷とせしをたなまじりぬるる  
くちらに下る日を来迎の深布に  
おともしをさしむるは深はるしとまを  
とくくおはは水の侍をさしむる  
口おしよ身を度しむる人

さねさ言のまを句くあたをちふん  
お年目おしちらりいゝしとまをあた  
さしに似のまをさる杜字をあれり  
いゝく白くぬる水俵をさしめぬ  
いゝかおらりおなをむくまをさし  
其感のいゝまをさしとまをさし  
吐ちぬるまをさしとまをさし  
せらりいゝまをさしとまをさし

たの業は為してたをたの業はたの  
のたおたのたのたのたのたのたの  
子孫あましく設くこと七十七たの  
むくのむきハ親族おことよること  
たのたのたのたのたのたのたのたの  
たの集おたのたのたのたのたのたの  
散く馮長を授おたのたのたのたの  
おのき一と養魂一たのたのたのたの

軍年親更くたのたのたのたの  
後おたのたのたのたのたのたの  
寿賀の一ををたのたのたのたの

七のたのたの

壽賀



徳道道人 千町



栃木縣下野國足利北々田島里 番地

明治廿年九月印刷  
同年十月 日出版

編輯兼出版人 相場平兵衛  
東京市本所區綠町二丁目十一番地

印刷人 木村貢藏

